

大坂から江戸を経て柏崎へ

西 羽 晃

桑名藩主の松平定敬と桑名藩軍は大坂で、慶応4（1868）年の正月元旦を迎えた。2日に桑名藩軍は京都へ向かい、3日には京都郊外の鳥羽で戦って敗れた。大坂城に戻ったが、徳川慶喜や定敬らは6日夜に大坂城を脱出して、幕府の軍艦である開陽丸に乗り込み、江戸へ向かっていた。

一方、桑名藩軍の中にはすぐに桑名へ帰った人もいたが、京都・奈良方面は新政府軍に抑えられているため、桑名藩軍の大勢は紀伊半島を回って桑名へ戻ることになった。志摩半島の国崎に到着した。ここで桑名城が降伏したことを知り、伊勢湾を横切って、江戸へ向かうことになった。しかし、多人数で行動することは危険なので、個々に江戸へ行くことになった。

定敬は正月11日に江戸に帰り着き、部下の藩士たち約300人ほども、やがて江戸に集まってきた。定敬は一橋邸に暫く居たが、慶喜が寛永寺に入り、謹慎したので、定敬も2月27日に桑名藩の菩提寺である深川の靈巖寺に入り、謹慎した。しかし、新政府軍が江戸へ攻めてきたので、兄の松平容保は国元の会津へ帰った。桑名はすでに降伏しており、定敬は桑名へ帰るわけにもいかず、桑名藩の分領地である越後柏崎へ行くことにした。



現在の靈岸寺

定敬は3月7日に築地の桑名藩下屋敷（浴恩園）で一泊して、翌日に横浜へ行き、16日に横浜からプロシャ船に乗った。この船は越後長岡藩がチャーターした船で長岡藩士らと共に、桑名藩からは久徳隼人ら約100人あまりが同行し

た。はるばると津軽海峡を越えて 23 日に新潟へ着き、あとは陸路を通り、同月 30 日に柏崎に着いた定敬は勝願寺に入った。

船に乗れなかった桑名藩士たちは幾つかのグループに分かれた。陸路を直ちに柏崎へ向かったグループは 3 月 23 日から 24 日にかけて柏崎に着いた。総宰職である服部半蔵、吉村権左衛門、沢采女ら穏健派一行は 4 月 3 日に寺泊で宿泊し、4 日夕方に柏崎に着いた。

過激派のグループ 80 人ほどは、江戸城を守備しようと暫くは江戸に止まったが、4 月 11 日新政府軍が江戸城に入ったので、旧幕府軍の軍隊に属して日光を経て会津を目指したが、途中で柏崎からの急ぎの知らせを受けたので、立見鑑三郎らの幹部は昼夜兼行で、閏 4 月 9 日に柏崎に着いた。

江戸に居た一部は旧幕府軍の彰義隊に属して、5 月 19 日の上野の戦いに参戦したが、敗北した。それぞれが別々になって、一部は会津を目指したが、遠藤利貞らは偽名を名乗って江戸で半年ばかり隠れたのち、11 月 28 日ころ仲間と共に桑名へ戻った。